

上野駅での飲み友達としての追悼

鴨懔, 巖

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

122

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

1980-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019286>

持前の江戸っ子気質ともいふべき小気味よい口調は、まことに明確で、御徒町界限で時折ひらかれた学生コンパなどの席では、我々の勉強不足が痛烈に指摘された。

ゼミや研究会での議論の延長は、飯田橋周辺の喫茶店などでもよく行われたが、われわれ日文科の学生は、先生の御自宅であった久喜へもよく出掛けた。今の久喜市も、当時はまだ久喜町で、先生のお宅は、その馬場というところにあった。

先生の書齋は、常に来訪者たちに開放されており、われわれは、そこで自由に書物を漁ったり、先生から直接に御指導をいただくことも出来た。

無遠慮な学生たちの訪問にも、いやな顔一つなさらず、昼となく夜となく、われわれの相手をして下さった先生の寛容さには、今さらながら頭の下る思いである。

「今の学生は、変に行儀のいい、ちっぽけな常識人みたいになっちゃって……」と、よく口にされながらも、ゼミや研究会を通して指導された学生たちを、本当に大事にされ、可愛がられ、自由闊達という法政の伝統的学風を、正しく受けつがせて下さった先生の存在は、まことに大きな意義を持っていたと思うのである。

(三三年・日文卒)

上野駅での飲み友達としての追悼

鴨澤 巖

元さんがいなくなってからというもの、ほとんど外で飲むということがなくなってしまった。

教授会のあとでは元さんと一杯やるのが楽しみだった。元さんにとってもそれはまんざらではなかったようだ。

「日文(法政の日本文学科)には酒を飲む人がいなくてね」とやや弁解めかしてぼくを誘うとき、ぼくもまた地理(法政の地理学科)の同僚に飲み相手が見当たらないことをかこつことにしながら、一も二もなく誘いに応ずるのだった。

普通の人は教授会のあと忙しいのだ。原稿を書いたり座談会に出たりで酒など飲んではいられないのだ。——元さんを追悼するとなると、どうしてもこんな調子の書き方になってしまう。そこへ行くと、元さんもぼくも、お互いのためならいつでも暇をつくり出す構えでいた。折角誘ったのに「今晚はあいにくふさがっていて」などと断られるそんな心配はまず無用だった。

とはいっても、もしこれが毎日だったらさすがの私たちでも辟易したことだろう。そこはよくしたもので、教授会のあとということ

になると、せいぜいのところ月に一、二回のことである。長い年月の付き合いの間には、月一、二回ではなくて週一、二回などという急拍子の期間もあったが、そういうときは教授会が頻繁に開かれるときで、どうせ何かせっぱつまった問題に振り回されているのだから、いずれ遣瀨ない気持ちにさせられていて、それはまたそれで適当な頻度ということになるのだ。つまりは元さんとならいつでも適当な頻度だったのだろう。

よくよくのことがなければお互い相手の誘いを断りはしなかった。たとえ短時間でも一緒に飲んで、早目に帰宅して仕事をすればいい、と思って飲みに行くのだった。どうにも都合のつかない用を抱えているときには、声を掛けられる前に断った。

こんな風なのが私たちの飲付き合いだった。ときには久喜まで招かれていたり、あるいは私たちの家の中間にあたる大宮で落ち合っただけのこともあるが、何とんでも教授会のあとというのが常であった。

ぼくが法政に来たのは一九五四年だが、それより五、六年も前から元さんとは知り合っていた。法政に来てみると、文学部教授会というのはずさまじいところで、民主派は悪人ということになっていた。完全な長老支配で、教授会は事を議するところでは必ずしもなかった。元さんやぼくを含む民主派は少数で、いつも齒がみをさせられていた。戦後民主主義の到達したところからあまりにもかけはなれていたその実態をあざわらうといった形をとりながら、私たち

はごまめの齒ぎしりをしていた。

どういう訳か民主派の主流はコーヒー党だったから、民主「左派」たる元さんとぼくとしては、コーヒーでは打ち止めにできず、ちくちくと一杯しけこむことになった。すぐ帰れるところがよいというので、元さんの久喜にもぼくの北浦和にも行ける上野界隈が私たちのおだをあげる場所となった。

その場所ときたら、駅の構内のスタンドとか大衆食堂とかいった、およそ風情に欠けるところばかりであった。あれはきつと、風情に富むところだったら終列車にも間に合わなくなることをおそれた元さんの知恵だったに相違ない。

元さんはそれでも大衆食堂よりはスタンドの方を好んでくれた。雑駁な駅構内とはいっても、大衆食堂にくらべればスタンドの方がまだしも良かったです。駅の大衆食堂は何と云ってそれなりの雰囲気しか持ち合わせていなかった。刺身の皿を運んでくるにしても、刺身すれすれに指の腹を皿にべったりと押しつけ、それをがちゃりと食卓の上に放り出す。刺身というのがまた氷も溶けおせていない代物とあっては、あまりにも佗びし過ぎはしないだろうか。他方、スタンドの方はこんな風であった。チーズ、ウィンナー、そらまめ、おでん、冷や奴、どれも今の値段なら百五十円といったお通しの札が壁に掛かっている。何もなしに飲む訳にもいかないから何かをとるのだけれども、その格安の値段が味への注文を封じていただけでなく、おでんはおでんとして温かく、冷や奴には削りぶし

やねぎがかかっている、それなりに心は和むのだった。

コーヒーを飲んでさえごまめの歯ぎしりをしていただけだから、酒を飲めばましてそうであった。民主主義の大義を語るふりをして、じつはぼやいていたのだった。大義を語る資質は私たち二人に共通に欠けていた。民主派のなかでも私たちは低回派なのであった。

だが、私たちのぼやきの対象だった文学部教授会の長老政治も、私たちの長年の努力とあいまって、大学を襲った周知の激流に洗われてはもはや力を失い、おそまきながら民主政治に席を譲らなければならなくなった。変化しはじめるとなると、心服する者としてなかつた長老政治はみるみる崩壊し、気がついたときは民主派が多数を占めていることになり、さてそうなると元さんもぼくも、もうぼやくことさえままならぬかの情勢となった。だが世の中はよくしたもので、元さんとぼくは断乎たる民主派などという勇ましい存在とはほど遠かったために、右顧左眄する民主派とでもいったらよいのか、何ともしまらない存在になってしまい、またもやぼやきの種に事欠きはしなかった。運が悪いことには右顧左眄というのは少なくとも現実無視の観念論ではないだけに、教授会内で雑用に使われやすい立場を占めることになった。以前長老支配の時代には、不穏分子ということでは暇であったものが、時代が変わって多数派になると、私たちの気の弱さも大いに手伝って、雑用にこき使われるようになった。ぼやきの種もそれにつれて増し、ますます上野駅行の道が踏み固められるかにみえた。

そのとき、元さんは病気にとりつかれた。晩年の元さんは、やたらと民間療法に凝っていたのだったが、あれは考えてみれば衰弱のきざしだったのだ。私たちは、元さんの物好きがまた始まったと思つて笑つて眺めていたのだが、あの頃何とかすればあるいはどうにかなつたのかもしれない。

雑用が増して上野詣でが必要になつたとき、上野詣では叶わなくなつた。

昨年三月、上野駅ならぬ久我山病院に元さんを見舞つたある日、学生が卒業論文の相談にきたのにぶつかった。その頃の元さんの容態ときたら、ぼくが自宅にいるときは、いつ急の連絡があるかも知れぬと家人に長電話を禁じていたほどだったのだ。元さんは息も途切れ途切れに学生に指導している。ぼくは腹立たしかった。だが元さんは、これこそ教師の勤めといったたまたま、一語一語に残り少ない命をちぎり渡しながら、学生に資料の集め方やまとめ方を教えていた。指導し終つて深く呼吸を整えているとき学生が「食事してきますが、食事が終わったらまたお邪魔していいですか」と尋ねた。学生の若さでは事情がわからないのも無理はないのかもしれない。疲れきつた元さんは、元さんにしてはまったく珍しく「またにしてくれないか」と言った。精魂こめた指導のあとで、もう余力は残されていなかった。

それに先立つある日、それほどはまだ衰弱しきつていなかったときのことである。病院に行くと元さんが奥さんにぶどう酒の栓をあ

けさせてぼくに飲ませてくれた。元さん自身はもう碌に飲める状態ではなかった。元さんとしてはせめてぼくに飲ませたかったのだらう。と解釈してぼくは、もしかしたら大いに不謹慎なのかもしれないが重病人をわきにおいてぶどう酒を飲んだ。元さんは「酒屋をやっているのがいてね、安くしてくれるんですよ。そうだ、鴨さんもあそこで買うといい。こんどそいつがきたとき紹介しておきますよ。安いですよ」と、息休めの小休止をとるところにはさみながら言ったあと、衝立の蔭の奥さんをよんで「おい、あそこどうやって行くんだ」などときいてくれるのだった。こちらはもう見当をつけていて、あと何回元さんに会えるのかなあなど思っているときに、安くぶどう酒が買えるように世話してくれるというのだから、混乱の極に達してしまう。「元さんが元気になったらそのぶどう酒で一杯やりましょうよ」などと言おうと思うのだが、下手なことを言えば涙声になりそうで、そんなことになったら大変だからそうは言わず、ただ「ええ、ぜひ買わせて下さい」などと笑顔で丁寧な返事をしておいた。

今これを書いている部屋に大理石の蓋物がある。元さんのためにと思って留学先のトルコのアンカラで大理石屋から買ってきたものだ。それは、元さんの計報から二ヶ月近くもたって本や衣類などとともにわが家に着いた。セロテープで止めた「小原さん」と書いてある紙片を、ぼくは風に体が吹きぬかれる思いで時間をかけて剝がし取った。ほかの人びとへのなにがしかのみやげものもはや配る

気が殺がれて、それらは今あたたら埃をかぶっている。昨春、大理石の蓋物が元さんに間に合いそうもないと判断したぼくは、取り敢えずイタリア製のぶどう酒の栓抜きを久我山病院に持っていった。元さんは、あけたばかりのぶどう酒があるというのに、別の壘で試させようとした。ぼくは慌ててそれをおしとどめ、結局、もう栓を抜いてある壘の栓をできるだけ強くびんの口に押し込み、空壘でさらに叩き込みさえした上、栓を抜いてみせたのだった。元さんは寂しそうに笑って見ていた。

ところで、元さんが嫌いだったのは、元さんの用語法によれば「偉いのさん」である。偉いのさんに必ず潜む欺瞞を憎んでいた。しかしその憎み方は正義漢のそれではなかった。他人を出し抜き蹴落として頭角を現わしていくことができない己の性を憐みいとおしみつつ、偉いのさんの偽善やあこぎさをぼやくのだった。

元さんは馬力をあげて仕事をやる型ではなかった。仕事ばかりしていたら、いったいいつ久喜の町の寿司屋に行つて、そこに集まってくる若い衆と話を交わす時間があるというのか、とも思っている風だった。がつがつ仕事をして偉いのさんになってしまったら庶民の一員ではなくなってしまうではないか、と怖れているようでもあった。そしてその底には、もともと自分は偉くなりうる型の人間ではないし、庶民としての弱さを克服しきれぬ型の人間でもないのだといった、正直ではあるがやや自嘲気味の人生観があった。かつて教授会で学生厚生補導委員という任に当たる人を選定することに

なったときに、時の学部長が小原さんの名を挙げると、元さんは即座に「ぼくは補導される側ですから」という不朽の名言を吐いた。上から見下ろすのは元さんの性に合っていなかった。

人生における使命などという立場からは、元さんの生き方にいろいろの批評も注文もあろう。だが、一つの人生は所詮一つの人生なのだ。あれこれ批評や注文に合わせて姿形を整える訳にはいかない。ぼくは、元さんが胸を張らず、しかも胸を張れない弱さをも自覚していて、いかにも元さんらしい嘘いつわりのない雰囲気醸し出しながら、人との付き合いを何よりも大切にしていてその生きざまを肯定する。元さんは、あいなるべくは他人を傷つけず、他人を傷つけない範囲で信念をもって誠実に進歩的にその人生を生きたいと願っていたのだ。

計報に接してから一年余り、ぼくは外で飲む習慣をほとんど失ってしまった。上野駅構内の私たちの古戦場のごときは、ついぞ絶えてのぞいてみたことさえない。(一九七六・五・三〇)

(法政大学文学部教授)

スリッパ

——小原元さんのおもい出

渡辺春輔

小原元さんとはじめてお目にかかったのは、終戦の翌一九四六年二月のことで、日本評論社は当時、成城の社長の家を事務所にして細々と営業をしていた、そこまでわざわざ近藤忠義先生のお使いで原稿を届けてくださったのである。

ぼくが玄関にお迎えすると、まだ学生だった小原さんがにこやかに立っておられた。そして、そこにぬぎすてられていたスリッパをはいて、編集室にはいつてこられた。

その何でもないことが、ぼくににとっては大変なことだったのだ。年のおしつまった社長の家の寒さはきびしかった。火はない。ボロ靴下を二枚重ねているが、廊下の冷えがこたえた。そんなとき、玄関をはいろうとすると、スリッパがおいてあった。これを履けば、ずいぶん足がたすかるだろうとおもった。履こうか、と誘惑されたがやめた。やめてよかった。それを履いたのは営業のKである。

事務所は広間に、編集・営業・経理がいっしょだった。ぼくは、